

第 64 回日本生殖医学会学術講演会

O-093

兵庫県, 2019.11.7-8

冬期の自宅採精精子運動率低下を防止する取り組みについて

大住 哉子<sup>1</sup>, 橋本 周<sup>2</sup>, 幸池 明希子<sup>1</sup>, 宮本 有希<sup>1</sup>, 森本 義晴<sup>1</sup>

<sup>1</sup>医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

<sup>2</sup>大阪市大医学研究科リプロダクティブサイエンス研究所

【目的】第 59 回日本卵子学会にて、外気温が自宅採精精子の運動能に影響することを示した。外気温が 20℃未満となる季節（11 月～4 月）は、自宅採精精液の精子運動率が有意に低下していたので、2018 年 1 月より精液の運搬方法を変更した。今回精液を冷氣から遮断し運搬することで、自宅採精精子の運動能が改善されたかを後方視的に検討した。

【方法】2015 年 2 月から 2017 年 11 月までは採精カップにハンカチを巻きつけるのみの運搬方法であったが、2018 年 1 月からは採精カップ全体をタオルで覆い、保温バッグなどに入れる運搬方法に変更した。特に気温が下がる時期には採精カップを冷やさないことを患者様にお願いした。大阪市の日平均気温（2016 年気象庁）を参考に、気温の類似した 2 ヶ月を次のように分類した。1 月群（1 月と 2 月：日平均気温 7.1℃）、3 月群（3 月と 12 月：10.1℃）、4 月群（4 月と 11 月：15.0℃）。運搬方法変更前と、変更後の精子運動率、さらに精子データ不良のため、一般体外受精予定から ICSI に変更となった率をそれぞれ比較した。

【結果】変更前と変更後の自宅採精における精子運動率はそれぞれ 1 月群（46.1% vs. 53.6%）、3 月群（44.0% vs. 51.9%）、4 月群（46.0% vs. 56.2%）であり、有意に上昇していた。また、11 月～4 月の低温時期での ICSI への変更率は、運搬方法変更後有意に減少（57.9% vs. 38.9%）していた。

【結論】外気温が低下する季節には精液を冷氣に曝さず、室温程度に保持し運搬することで精子運動率低下を防止できることが示された。